

タイトル『風の贈り物』

作・村尾悦子

【登場人物】

梶 美保 梶武彦美術館の館長 六十歳
梶里絵子 美保の娘 三十五歳
大沢和樹 写真館の店主 四十二歳
大沢麻美 大沢の娘 十八歳
川本順平 漁師 二十八歳
柳田高志 建設コンサルタント 四十五歳
安田徳一 大工 七十歳
高木卓郎 弁護士 三十二歳

【時代】

一九八七年(昭和六二年) 五月〜十月

1

闇の中にとぎれとぎれの雨だれの音。やがて遠くから波の音。波の音は次第に大きくなり、雨だれの音を呑み込んでしまう。だんだんと闇が白んできく。

五月中旬のある晴れた日。

日本海に面した岬に建つ梶（くぬぎ）武彦美術館のカフェテラス。

舞台手前はテラスになっていて奥は喫茶室。喫茶室の上には屋根がある。喫茶室には上手に一つ、奥に一つ、ドアがある。上手のドアは美術館に続いている。奥のドアは住居につながっている。喫茶室の奥の方にはカウンターがあり、手前に椅子やテーブルがある。テラスにも椅子とテーブルがあり、上手には人がすつぽりと隠れるくらいのちよつとした植え込みがある。下手には庭があり、庭の奥は駐車場につながっている。テラスの手前、つまり客席は海。

下手奥から柳田高志が入ってくる。柳田、喫茶室に入るとテーブルにつく。すぐに立ち上がり、椅子を見、自分の尻を触る。濡れているらしい。別のテーブルに座る。カバンから新聞を取り出し読もうとする。新聞の上にぼたぼたと水が垂れる。柳田、天井を見上げる。柳田、カバンから折り畳み傘を出し、さす。また新聞を読みだす。

柳田　：銀座の一坪分で後樂園球場の五百倍か…。すげえなあ…。

下手から川本順平が発泡スチロールの箱を抱えて入ってくる。

柳田に気づくと不思議そうに見る。

柳田　珍しいですな、今時こんな雨漏りは…。

川本　晴れてますよ、外。

柳田、外を見る。

柳田　確かに。しかしね、ほら(と手で水を受ける)

川本　(天井を見て)本当だ、なんでだろう？　冷てっ。ここもだ。

喫茶室奥のドアから美保が入ってくる。ズボン姿に腕まくり。

美保　(柳田を見て)あーあ、失敗だ。あなた、また来てるの…。

柳田　(立ち上がる)こんにちは。どうも、お邪魔してます。

美保　(ため息をつく)傘なんかさしちやっつて。

川本　雨が漏れてるって。

柳田　外は快晴、中は大雨って、まるでなぞなぞですねえ。

美保　答えは簡単！　私が屋根に水まいたの。

柳田　ほう、屋根に水を…。

川本　なんでそんなことしたんすか？

美保　こないだの大雪、すごかったでしょ？

柳田　季節外れもいとこでしたね、もう五月だっていうのに。

美保　：あれでね、屋根のかわら、ずれちゃったのよ。でね、朝からずっと修理。

川本　美保さんが？　屋根に上ったんすか？

美保　イエース。

川本　落ちたらどうするんすか。

美保　いい気持ちよ、屋根の上って…、沖の方まで良く見えて。でね、直ったかどうか試

しに水かけてみたの、バケツで。

柳田 なるほど、それで…。(傘をたたむ) ぼたぼた漏れてましたよ。

川本 徳さんに頼めばいいじゃないすか。

美保 腰傷めてるんだって。

柳田 なんなら私がお手伝いしましょうか？

美保 けっこうです。その手は桑名の焼き蛤。

川本 あ、そうだ、これ。(発泡スチロールの箱を差し出す)イカ、とれたて、さつき漁から帰ってきたんで。

美保 あらー、今年も解禁になったのね、ありがとう、もうすっかり一人前ね。

美保、箱を受け取り、カウンターの上に運ぶ。

川本 まだまだっす。

美保 だってもう一年たつたでしょう。

川本 さすがに機械の操作やトロ箱詰めるのは慣れたけど、やっぱり魚の居場所はね。親方なんかの経験にはかなわないっす。魚探だけじゃだめなんすよ。

美保 朝ご飯、食べた？

川本 親方んとこで。イカそうめん、イカの天ぷら、イカの鉄砲焼き、イカと野菜の炒めもの…。

美保 イカづくし、おいしそう！ じゃ、今、コーヒー入れるからそこに座って。

美保、カウンターでコーヒーを淹れる。

柳田 コーヒーの香りに芸術鑑賞…。ひきつけられますよねえ。

川本 はあ？

柳田 梶武彦画伯の絵ですよ。なんていうんでしょう、神秘的っていうか…。

川本 そうなんすよ、たとえば…キャンバス一面に漁火を描いた作品なんか…、幻想的な青の中によく見ると黄色やピンクなんかの色がいっぱい使ってたって…。

柳田 ああ、ありましたね、大作だ。

川本 海って言っても、いろんな海があるんだって思いますよね、先生の絵を見ると。

柳田 正直言つてこの岬に来るまでお名前すら知りませんでしたけど。

川本 みんなちよつと驚くんすよね。こんな殺風景な岬に美術館が建つてて。

柳田 しかし惜しいなあ…このままにしておくなんて…。

美保、コーヒーを持ってくる。

美保 何度いらしても無駄ですよ、売りませんよ、私は。

柳田 まあそうおっしゃらずに話を聞いてください。

川本 売らって、柵先生の絵ですか？

美保 違うの、ここ、この土地。売ってくれって、こないだから。この人、地上げ屋なの。

川本 地上げ屋って、最近はやりの？

柳田 建設コンサルタントです。

美保 似たようなもんじゃない。

柳田 地上げ屋っていうと、イメージ悪いですからねえ。でもこちらはまっとうな仕事なんでしょう。たとえばここにAという土地がある。そしてここにBという土地がある。このAとBを合わせればDと大きなショッピングセンターができる。町の人も喜ぶ。しかしそのためにはこの間のCという家の人に立ち退いてもらわなければならない。そこで私どもが出ていくわけです。

川本 トラックで玄関に突っ込むとか…。

柳田 馬鹿言わないでください。私はまっとうな仕事してるんです。真心で説得するんです。いやだなあ、最近、変なやからが多いから…。買う人と売る人の利益をうまく合致させ、コーデイネートしていくのが我々の仕事です。

川本 で、誰なんすか？ ここ買いたいって人…。

柳田 この土地の出身で手広くいろんな商売している人なんですけど、一度、この美術館に来て、この庭からの景色をすっかり気に入ってしまったようなんです。で、長年の勘でぴんときたらいいんですね、ここにホテルを建てたら当たる、この景色は売れると。

美保 勝手にそんな計画たてないでちょうだい。

柳田 ですからそこが交渉ということであ…、こちらもかなりいい条件を用意してるんですが…。

美保 お金積まれたってねえ。

川本 そりゃそうだよな、ずっと住んでるんだし…。

柳田 今、東京じゃ地価が上がってすごいんですよ。それが地方にもきてるんです。あちこちでリゾート開発進んでますよ。今がチャンスです。ここ売ってもっと条件のいいところにバーンと新しい美術館建てませんか？ こう、もっと派手な宣伝して…。いや、そんなことしなくても絵も一緒にホテルに買い取ってもらえば、ホテルの中に美術館ができるんだ、いい景色を見ながら、一流のシェフの味を楽しみ、ついでに芸術も鑑賞する…、こりゃいいぞ、女性客に受けること間違いなしだ…。

美保 ついでにって、なんか気分悪い。

柳田 いつ来てもお客さん、あんまり見かけませんよねえ。せつかくの宝が持ち腐れだ。

川本 知らないの？ 柵先生は美術界じゃちゃんと知られてる人なんだよ。

柳田 それはもちろん、そうでしょう。…でも個人美術館なんてねえ、所詮道楽みたいなもんですよねえ。経費ばかりかかって、あちこちで潰れてます。

美保 お金のためにやってるんじゃないの、死んだ夫の絵をみんなに見てもらいたくてや
ってるんだから…。あなたさっき夫の絵はすばらしいって言ってたじゃないの、あれや
っぱり嘘ね！ もう帰ってよ、そんなこと言うなら。

柳田 (慌てて) ああ、すみません、でも嘘じゃないです、本当にすばらしいと思ったんです
…。(時計を見て) あ、いけない、時間だ、行かなきゃ、もう一軒ありましてね、ずっと反
対してた息子さんが急に承諾してくれるっていうんで、これから契約に行くんです。じ
ゃあ奥様、また来ますんで…。どうぞ良くお考えになってくださいね。

柳田、下手に出ていく。

(続く)